

# 日本近代文學作品選讀

全國高等院校教材

簡佩芝 陳華炎 編



吉林人民出版社

全国高等学校外语教材

**日本近现代文学作品选读**

(日语专业用)

简佩芝 陈华炎 编

吉林人民出版社

## 日本近代文学作品选读

简佩芝 陈华炎 编

\*

吉林人民出版社出版发行

长春市第二印刷厂印刷

\*

850×1168毫米32开本 16印张 插页4 384,000字

1990年12月第1版 1990年12月第1次印刷

印数: 1—1,200册

ISBN 7-206-00972-7

I·94 定价: 7.50元

## 序

刘和民

现在我国高等学校的日语专业多数开设有日本文学课。日本文学专业自不待说，语言专业、翻译专业、师范专业等也都是把这门课程作为高年级的必修课，这是有充分理由的。语言是思维的工具，交际的工具，同时也是文化的载体。对于语言的前两个性质或功能人们比较熟悉，对于后一功能则常常忽略。外语教育和外语学习的实际经验告诉我们，不了解语言当中的社会文化，就无法真正掌握语言；同时，不精通一个民族的语言，也不可能透彻了解那个民族的文化。语言和文化的关系就是如此密切，互为表里的。毫无疑问，文学艺术是民族文化构成的极重要的一大系统。对于日语教学来说，开设日本文学课一方面是阅读或精读课在高层次上的延长，同时也是学习日本文化，或者更确切地说，是熔语言与文化于一炉的、日语专业教学的重要环节。

日本文学课开设的历史不长，经验也不多，教学单位尤感困难的是缺乏适用的教材。为解决这个问题，简佩芝、陈华炎两先生根据他们的教学经验编写了这一部《日本近现代文学作品选读》（现已完成、定稿现代篇和近代篇）。全国外语专业教材编审委员会日语编审组于1985年审议了这部教材，认为选材比较广泛、丰富，基本上概括了各时期、各流派有代表性的作家和作品，并附有相当详细的解说和注释，注释都是根据多方面资

料，经过鉴定、分析写成的，并不是照搬现成的材料。编审组认为这部《日本近现代文学作品选读》适合作日语专业高年级教材，也可供其他日语学习者和爱好、关心日本文学的读者阅读、学习，建议公开出版。

时间过去两年，这本书一直没能问世，原因之一是此书的解说和注释都是用日语，这难免影响社会上的普及面，影响出版者的经济效益。我以为作为大学外语专业的教材，原本与对照读物一类的书籍不同，理应用原文解说和注释，这也是培养和提高学员阅读原文文学作品和文学评论的能力的一种手段。此次吉林人民出版社不计亏盈出版这部教材，无疑是对日语教学的学科建设作了一件好事，是值得感谢的。

1988年3月

# 目 录

序..... ( 1 )

## 近代篇

日本近代文学概観..... ( 3 )

第一課 浮 雲 二葉亭四迷..... ( 11 )

第二課 金色夜叉 尾崎紅葉..... ( 31 )

第三課 大つごもり 樋口一葉..... ( 48 )

第四課 破 戒 島崎藤村..... ( 68 )

第五課 高瀬舟 森鷗外..... ( 95 )

第六課 ころも 夏目漱石..... ( 114 )

第七課 城の崎にて 志賀直哉..... ( 144 )

第八課 地獄變 芥川龍之介..... ( 156 )

第九課 嬰兒殺し 山本有三..... ( 178 )

第十課 近代詩歌

一、竹 萩原朔太郎..... ( 215 )

二、永訣の朝 宮澤賢治..... ( 218 )

三、短 歌 石川啄木..... ( 224 )

1. 一握の砂

2. 悲しき玩具

## 現代篇

日本現代文学概観..... ( 231 )

第一課 伊豆の踊子 川端康成..... ( 238 )

第二課	党生活者	小林多喜二……………	( 275 )
第三課	播州平野	宮本百合子……………	( 309 )
第四課	夏の花	原民喜……………	( 344 )
第五課	繪 本	田宮虎彦……………	( 368 )
第六課	遙拜隊長	井伏鱒二……………	( 405 )
第七課	赤い繭	安部公房……………	( 445 )
第八課	野 火	大岡昇平……………	( 452 )
第九課	姨 捨	井上靖……………	( 471 )
第十課	現代詩		
	一、歌	中野重治……………	( 498 )
	二、ぼろぼろな鴛鳥		
		高村光太郎……………	( 501 )
	三、わたくしは	谷川俊太郎……………	( 503 )
后記			( 507 )

# 近代篇





## 日本近代文学概観

〔明治初期——近代文学の芽生え〕 明治1—20 (1868—1887)

徳川幕府を倒し、維新政府によって日本の近代史がはじまったが、これは文学史に近代がおとずれたことを意味しない。日本の近代化は政府の指導による速成的なもので「文明開化」、「富国強兵」のモットーは機械的、物質的方面に向けられ、近代的思想の基盤をなす人民の覚醒は遅れた。

文学は、和歌、俳句、戯作、戯曲すべて江戸時代そのままであった。しかしながら、時勢の進展につれて、新時代に対応する動きが現われてきた。文明開化の世相をいち早く反映するかながきろぶん 仮名垣魯文の『西洋道中ひざくりげ 膝栗毛』、『あぐらなべ 安愚楽鍋』などの戯作文学が広く読まれていた。このころ、かとうひろゆき 福沢諭吉、なかむらまさなお 加藤弘之、にしあまね 中村正直、なかえらようみん 西周、中江兆民らの先覚的知識人たちは多方面にわたる啓蒙活動を行い、特に諭吉の『西洋事情』、『学問のすすめ』などの著述は一般民衆に対して大きな影響を及ぼした。この啓蒙思潮の中で、1877年(明10)ごろから翻訳文学が、1880年(明13)ごろから自由民権運動の手段としての政治小説が盛んになった。これらは新文学の創

始をめぐすものではなかったが、間接的にその氣運を高めた。

やがて西洋の文学、芸術が移入され、詩歌の改良運動の一つとして新詩型の新体詩が生まれた。<sup>いのちえてつじろう やたべりよう</sup>井上哲次郎、<sup>とやまさかざ</sup>矢田部良吉、<sup>とやまさかざ</sup>外山正一らによる『新体詩抄』である。これは英、仏の詩の翻訳と著者の詩作を収めた七五調文語定型詩で、旧来の短詩型を排し、西洋風の長詩を生み出し、新しい近代詩様式の端緒を開いた。だが、もっとも注目すべきは1885—1886年

(明18—19)に発表された坪内道遙の写実主義小説論『小説神髓』で、勸善懲惡の功利主義的文学観や戯作、娯楽性を否定し、文学は既成道德などに従属するものではないという、文学独自の価値を説いた画期的文学論として近代文学の向うべき指針をうちだした。道遙はこの文学理論の具体化として『当世書生氣質』(1885)を書いたが、全体として戯作的趣向を脱しきれなかった。この道遙の不徹底を越えようとしたのが二葉亭四迷で、彼はロシア文学から学んだ卓越したリアリズム理論を『小説総論』(1886)にまとめ、小説『浮雲』(1887—1889)を書いた。この作は未完に終わったが、開化期に生き、苦悩する近代知識人の青年の典型を描き、当時の社会の皮相な近代化への痛烈な批判となった。その表現も言文一致体であり、近代小説の先駆的作品となった。以上はすべて広い意味での啓蒙思潮と欧化主義の時代を背景とするものである。

〔明治中期——近代文学の成長〕明治20—38(1887—1905)  
1887年(明20)ごろから、<sup>おざきこうよう やまだ びみよう けんゆう</sup>尾崎紅葉、<sup>しや こうだろはん</sup>山田美妙らの硯友社の文学や幸田露伴の文学が文壇の中心となった。『小説神髓』と元禄期の井原西鶴の写実との結びつき、前期の欧化主

義の反動としての国粹主義、伝統尊重の風潮、この時流に乗った擬古の小説は広く大衆に迎えられた。「三人妻」、「金色夜叉」などを書いた紅葉と「風流仏」、「五重塔」などを書いた露伴は世に「紅露」と並び称された。紅露の文学の陰に初期浪漫主義の思潮が芽生えていた。森鷗外の『舞姫』（1890）などがその代表作で1893年（明26）創刊の雑誌「文学界」がそれを受けつぎ、北村透谷は評論で、個人の尊厳や、人間の精神の崇高を強く主張した。この「文学界」に接して近代精神に目覚めた樋口一葉は、「たけくらべ」、「にごりえ」（1895）など、封建遺制の中に苦しむ女性を描き、独自の作品を発表した。硯友社の作家も現実社会に関心を示し、泉鏡花の『夜行巡查』（1895）、川上眉山の『書記官』（1895）などは観念小説、広津柳浪の『黒蜥蜴』（1895）などは深刻小説（或いは悲慘小説）と呼ばれた。明治30年（1897）代前半の浪漫主義最盛期には泉鏡花、国木田独步、徳富蘆花らがそれぞれの資質を発揮する浪漫的な作品を書いた。明治30年代中期から前期自然主義と呼ばれる、フランスの自然主義の移入が試みられ、小杉天外、田山花袋、永井荷風が模倣的作品を発表し、人間、社会に対する深刻な関心をよびおこす機縁の一つとなった。

詩では森鷗外らの訳詩集『於母影』のあとをうけて、明治30年代は、浪漫的叙情詩の最盛期となった。島崎藤村の『若菜集』（1897）以下の四詩集は画期的であり、内容、形式ともに明治新体詩を完成させたものである。なお、土井晩翠、薄田泣菫も独自の浪漫詩を発表した。蒲原有明は象徴詩を創始し、上田敏の訳詩集『海潮音』とともに詩の新しい展開をもたらした。

この時期に古来の和歌が近代短歌となり、俳句も写生による実感の表現形式として革新された。短歌、俳句の革新は正岡子規によって行われた。明治20年代後半、子規は写生に目をひらいて近代俳句の道を拓き、30年代初頭には、写生と万葉復帰を唱えて短歌の革新を始めた。(俳句は雑誌「ホトトギス」に、短歌は「アララギ」に継承される)。一方、与謝野鉄幹は短歌の近代詩化をめざし、浪漫主義思潮に乗じて新詩社を結成し、詩歌総合雑誌「明星」を創刊した。石川啄木、北原白秋らがこの派から輩出するが、もっとも注目されるのは与謝野晶子の歌集『みだれ髪』であった。

〔明治後期——近代文学の確立〕 明治39—45 (1906—1912)

日露戦争を契機に資本主義にもとづく近代国家体制はほぼ整い、人民の近代的な自我意識が高まり、現実認識の深まりがもたらされた。ここに自然主義の文学運動が急速に発展したが、社会性の稀薄は作家をして狭い生活環境に跼蹐する私小説をうみ出させることにもなった。

日本の自然主義文学は島崎藤村の『破戒』(1906)に出発したが、次いで田山花袋の『蒲団』(1907)によって、その性格と方向がおのずから定まったと言えよう。ほかに国木田独步、徳田秋声、正宗白鳥、岩野抱鳴らがあり、自然主義は1910年(明43)ごろまで文壇を風靡した。この思潮の最盛期に、高度な教養とヨーロッパ生活の体験を持つ夏目漱石と森鷗外は、自然主義の世界の狭小さ、知性の欠如にあきたらず、批判的態度をとった。漱石はもと英文学者であったが、正岡子規に俳句を学び、「ホトトギス」に『吾輩は猫である』(1905)を発表し、小説家として出発した。彼は『坊

ちゃん』、『草枕』などによって低徊派、高踏派、余裕派などの称を得たが、後の諸作はいずれも現実や道徳と知識人の内面との矛盾葛藤を照らし出し、人間のエゴイズムを深刻にえぐり出した。鷗外は前記のように『於母影』、『舞姫』によって活動を開始し、『青年』、『雁』など浪漫的な抒情風な作品を書いたが高踏の立場から自然主義を批判しつつ、高雅で知性豊かな作品を発表した。漱石も鷗外も文壇の傍流ではあったが自然主義の無思想性とは異質に社会や人間に対する倫理的な批判をつらぬいた点に共通性がある。漱石、鷗外はまた大正期に現われる新人に強い影響を与えた。1910年（明43）ごろから反自然主義の思潮の一つ、新浪漫主義（耽美主義）がおこった。これは自然主義が人生の醜悪面を暴露する傾向のはなはだしいのに反撓し、フランス世紀末思潮の影響を受けて官能享楽、退廃的な美を見出すことに意義を求めたもので「明星」を受けつぐ「スバル」と、永井荷風の主宰する「三田文学」を中心とし、永井荷風、谷崎潤一郎に代表され

詩では、明治30年代後半の象徴詩は、三木露風、北原白秋により、40年代に情調象徴の多彩な展開を見せた。また社会主義的傾向をもつ詩人に兒玉花外、石川啄木があった。

短歌は「明星」の後、雑誌「スバル」に北原白秋や吉井勇が耽美的作品を発表し、また生活派歌人石川啄木、土岐哀果、自然主義的傾向の前田夕暮、若山牧水らが注目された。子規没後、伊藤左千夫が「アララギ」を創刊、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉らがこれによった。

俳句は、正岡子規の伝統を継ぐ「ホトトギス」の高浜虚子らと、形式打破、自由律、無季題の「新傾向派」の河東碧

梧桐、荻原井泉水らが活躍した。

演劇では西洋近代演劇の刺戟を受けて、自然主義運動と同時期に新劇運動がおこった。島村抱月の自由劇場などの上演運動があり、新劇の発展に寄与した。

〔大正期〕大正1—15 (1912—1926)

第一次大戦を前後する大正期は日本の資本主義が世界列強に伍して帝国主義段階に到達した。経済生活の向上と同時に労働不安が大きな社会問題となったため、民主主義の気運が台頭した。社会運動、労働運動が活発化してきたが、一方では治安維持法が制定されるなど、社会矛盾が激化した。文学の展開にもそうした時代性が投射されている。

大正期にはいっても島崎藤村、田山花袋、徳田秋声、正宗白鳥ら自然主義の作家たちの活動は続いた。だが、大正期の文学を実質的に推進させたのは反自然主義の今一つの思潮新理想主義（人道主義）である。これは1910年（明43）に武者小路実篤を中心<sup>しらかば</sup>に創刊された雑誌「白樺」に拠る作家たちで、志賀直哉、有島武郎、里見弴、長与善郎らである。彼らは自然主義とともに耽美主義をも否定し、自我の尊厳を重んじ、個性を全面的に伸ばすことを旨として正義と愛を重視した。彼らはまた、明治期の上流指導層の子弟にあたる人々で、およそ社会的経済的に恵まれた境遇のなかで個性を形成した知識人であり、それだけに個人主義に徹し、現実を超越した人道主義の主張を掲げ、その表現としての文学を追求しえたのである。この派の影響下に滝井孝作、倉田百三、宮本百合子らがいた。

前記の自然主義、新浪漫主義（耽美主義）と新理想主義（白樺派）の三傾向を批判、あるいは継承し、近代個人主義

の立場から現実を新しい認識のもとに把握しようとするところに、新現実主義と呼ばれる共通の基盤をもつ、次の三つの新傾向が現われた。新思潮派——芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、山本有三らは、雑誌第三、四次「新思潮」により、自然主義の感性的実感よりも、理知や技巧を重んじ、現実、人間に独自の解釈を加え、テーマの鮮明な作風を見せた。故に理知派、新技巧派ともいう。奇蹟派——葛西善蔵、広津和郎らは、雑誌「奇蹟」により、自然主義系の私小説を発表した。三田文学派——佐藤春夫、久保田万太郎らは新浪漫主義系の詩情に富む作風を示した。

詩では北原白秋、三木露風、木下奎太郎らの活躍から文語、口語自由詩の時代となる。高村光太郎は退廃的傾向から「白樺」の人道主義的傾向に移り、この傾向に千家元麿らがある。また、大正デモクラシー気運から民衆詩派が起こり、山村暮鳥らが活躍した。これに対し、芸術派に日夏耿之助、西条八十、佐藤春夫らがあった。室生犀星は独自の詩境をひらき、萩原朔太郎は口語詩の完成者としてもっとも注目される。また、独特の宇宙感覚を持ち、倫理、宗教的理想を歌った宮澤賢治がある。

短歌では斎藤茂吉の『赤光』、北原白秋の『桐の花』以後、この時期は近代短歌最盛期となる。「アララギ」の長塚節、島木赤彦、土屋文明、釈迢空のほか、与謝野晶子、若山牧水、前田夕暮、木下利玄らがそれぞれに多彩な作風を示した。歌論では斎藤茂吉が『短歌における写生の説』で正岡子規以来の写生説を完成させた。

俳句では、高浜虚子門下に村上鬼城、飯田蛇笏らがあり、客観写生の「ホトトギス」派全盛期となった。



演劇では、岡本綺堂<sup>おかもと きどう</sup>、中村吉藏<sup>なかむらきちぞう</sup>ら戯曲作家のほか、菊池寛<sup>きくち かん</sup>、山本有三<sup>やまもと さん</sup>らも戯曲を書き、上演された。小山内薫<sup>おさない かおる</sup>と土方与志<sup>ひじ かたよし</sup>は、1924年（大正13）「築地小劇場」を創設した。